文　化

問われる「文化の盗用」㊤

ファッションの分野で、デザインや広告の内容が他者の文化を都合良く流用する「文化の盗用」だとして批判される事例が相次いでいる。芸術は異文化から刺激を受けて発展してきた。他文化の尊重と創作をどう両立するのかが問われている。

「弱者からの収奪」と批判

創作との線引きが課題に

2015年、米ボストン美術館のイベントが「文化の盗用」だとして批判を受けた＝John Blanding/The Boston Globe via AP

3月、イタリアの高級ブランド、ヴァレンティノのウェブ広告がSNS（交流サイト）で「炎上」した。日本人モデルが着物の帯を思わせる生地の上を、ハイヒールで歩くシーンだ。「日本の文化を侮辱している」などと批判が相次ぎ、同社は該当する広告をウェブ上から削除し、SNS上に謝罪文を投稿した。

近年「文化の盗用（cultural appropriation）」が問題視されることが増えている。日本の着物を巡っても2015年、米ボストン美術館が開いたイベントも論争を呼んだ。モネの絵画「ラ・ジャポネーズ」の前で着物を試着し撮影する企画が「文化の盗用で人種差別的だ」という抗議を受けて中止となったのだ。

このほか、ファッションショーでは白人のモデルがネーティブアメリカン（北米先住民）の羽飾りや黒人文化の一部とされるドレッドヘアなどの髪型をすることで非難される事例もある。

文化の盗用は「力に上下関係があるときに問題となる」と服飾史家の中野香織氏は話す。旧宗主国や社会の多数派が、かつての植民地や立場の弱い人種・民族の文化を流用する際に批判が集まりやすい。ボストン美術館の件も「抗議していたのは、米国に住む中国などアジア系の人々だった。日ごろ差別を経験し、アジアの文化を利用されたことに抵抗感を覚えたのではないか」とみる。

背景には、2013年に始まった「ブラック・ライブズ・マター（BLM、黒人の命は大切だ）」運動があると中野氏は指摘する。黒人に限らずマイノリティーの権利が意識され、特にドナルド・トランプ前大統領の就任以降は「メキシコとの国境に壁を築くのに、（先住民の衣服などの）文化だけいいとこ取りをしている」という反感が強まり、西欧のブランドには厳しい視線が向けられるようになったという。

一方で「ファッションは互いの文化を借用することなくしては成立しない」（中野氏）側面もある。20世紀初頭に仏デザイナー、ポール・ポワレがデザインしたコートやドレスは、日本の着物に影響を受けたゆったりしたフォルムが特徴だ。腰をきつく締め付けるコルセットを着用する西洋女性の服装が変わるきっかけの一つになった。異文化から着想を得ること自体をタブー視してしまえば「表現の自由がなくなりかねない」（同氏）。

ファッション以外の分野でも、文化の盗用は議論になる。19世紀後半にアフリカ系米国人の中で生まれ、様々な音楽のルーツになったブルース。ポピュラー音楽研究者の大和田俊之氏によると、作曲や演奏に「早い段階で白人が関わり、混交してきたことが研究では重視されてきた」。

だが、近年は同時に「黒人のコミュニティーにお金が十分には払われていなかったという事実」も無視できなくなっており、ブルースの歴史を巡って「政治的に正しい記述をするのが難しい」という。現代でも「例えば（いまだ白人が大勢を占める）ポップス部門で獲得したいという黒人アーティストに見えない壁はないかなど、構造的な差別に目を向ける必要がある」と大和田氏は説く。

美術でもモネはジャポニスム（日本趣味）から影響を受け、ピカソはアフリカ彫刻の要素を取り入れるなど、他文化との出合いは創作の源になってきた。「現代美術では、あえて挑発的な表現で議論を喚起するという側面もある」と文化研究者の山本尚美氏は指摘する。

さらにはアプロプリエーションアート（他人の既存作品を文脈を変えてそのまま使う表現方法）など「引用の技術が確立していることもあり、文化の盗用を気にして表現が必要以上に萎縮する状況にはない」（山本氏）。作品に問われるのは「植民地主義などの歴史や文脈を踏まえ、どのような問いや批評性を投げかけているか」だという。

「文化の盗用」として問題になった事例

2013年	ケイティ・ペリーの和服風のステージ衣装に批判
15	米ボストン美術館の着物試着イベントが中止に
16	「マーク ジェイコブス」がファッションショーでモデルの髪形をドレッドヘア風にしたことで批判
19	キム・カーダシアンが自身の補正下着ブランドを「KIMONO」と名付け批判を浴び、名称変更
21	「ヴァレンティノ」のウェブ広告で、着物の帯に見える布を踏む演出が炎上

新しい連載小説

ふりさけ見れば

7月20日から新しい連載小説「ふりさけ見れば」（安部龍太郎作、西のぼる挿絵）が始まります。（1面参照）

安部龍太郎氏

西のぼる氏

（作者の言葉）

中国との関係を抜きにしては、日本の歴史や文化は分からない。三十年ほど前に中国を旅した時、そう痛感した。いつかは、そうした視野を持つ小説を書きたいと思っていたが、実現できないまま忘却していた。

ところが二〇一三年に再び中国を旅し、忘れていた初心を突然思い出した。そして遣唐使の物語を書けばこの課題をクリアできると、大きな手応えを感じた。阿倍仲麻呂と吉備真備を主人公とする物語に取り組む山場である。

執筆にあたって西安郊外から天山南路へとつづくシルクロードを取材してきた。仲麻呂がいた唐の都が、アラビアやローマとも交易していた世界帝国だったことを実感したかったからである。

[illegible]、九州国立博物館を訪ね、復元された遣唐使船を見た。従来は平底の脆弱な構造だと考えられていたが、最新の学説にもとづいて舳先に水押をつけ、船体は[illegible]にし、船内には防水隔壁をつけた二十分の一サイズを作ったのである。

その機能性は見事で、当時の技術の高さをいかんなく示している。この船が日本と唐をつないだのだと、[illegible]頭が下がる思いだった。

nippn
めちゃラク
ホットケーキミックス